目次

一
. 3
二

「貴方がすることは決して良い…ことじゃないのよ。私を助けたいからってこんな勝手な……」

「助けて貰っといてお礼は無し？」

「貰いたいなんて……」

「じゃもう一回捕まってれば？」

　三井先生は俺の治療を終え、静かに椅子に座った。

　俺の額、他に手足が傷だらけ。まだ所々流血しているが、絆創膏がギリギリ止めてくれる。
　まぁパトカーの前に自転車で飛び出したらこうはなる。死んでないだけマシ。

　それよりよくラブホといえ傷の少年と意味深の先生を OK にしたなぁ。噂でラブホの受付人はあまり客を見ないらしいが、ここまでとなると心配になる。だからラブホ殺人事件が起きるのだろう。

　もしや監視カメラがある？ あるとしたら声まで届いてるのかな。さすがに無いか。

「先生は捕まりたかったの？」

　大雨の音が鼓膜を震わせる。俺達は服を着替えバスローブだった。そしてお互い面と面を向き合い、一人用ソファに座っている。

「……捕まりたかった。そしたら完成するじゃない。生徒を守る勇敢の教師」

　長い髪を下ろした先生はどこか色気がある。

　意外と胸があるんだな。隠しているのがもったいないと思うが、女性には恥じらいを持って欲しい気持ちもある。
　なんという我儘だ。だが男はそうゆうもんだ。

「話聞いている？」

「え？　　意味が分からなくてちゃんと聞いてなかった。とりあえず先生はアホだなと思う。逃亡もアホだけどそれ以上に」

「どうして助けたの？」

「だっておかしいじゃん。先生は確かに殺人助手かもしれないけど、根本的に悪いのは俺じゃん。でも俺は捕まりたくない。悪いと思ってないから。たとえ数年檻に入るだけでも嫌だな。檻に入るという事は罪を認めてるから」

「それは前から考えていたの？」

「うんん。先生が捕まると分かってから。だからこの責任は先生にもあるんじゃない」

　俺は腕を組み眉を上下へ崩すと、先生は愕然としていた。

「ごめんなさい……」

「謝っても嬉しくないよ。謝ることは誰でも出来るじゃん。お金だよ。金は人にとって一番大切なんだから大金を持ってこなくちゃ。安いプレゼントもいらない、恩返しもいらない。信用が出来て大切なのは金だけ」

「また寂しい事言わないでよ」

「親に捨てられ殺して挙句の果てに先生までに裏切れた身なんだよ。金以外で何がある？
　今更抱かせてあげるとか言うなよ。痛くてしんどいし」

　先生は悲しそうな、怒りたいような顔をする。

「先生……、は色々思うけど高橋君と今一緒に居れて嬉しい。お金では買えないふわふわとした気分よ。高橋君もそうゆうの無いの？」

「無いよ。感情なんか」

「感情が無いのに私を助けたの？」

　鼻に付く台詞に俺は一瞬立ちあがろうとしたが、怪我が痛くて椅子から離れられ無かった。

「……うざいな。ごちゃごちゃ言ってないで助けてくれてありがとうございましたって言いなよ。お礼はタダなんだから」

「助けてなんて……これで罪が増えたんだよ。今もきっと警察は追ってるし、明日になれば私達は……」

　そんなの分かっている。けど、それでも、これが間違いでも全部正しいにしたかった。

　世の中理不尽なのに、今だけが正の理屈を成り立たせるのはおかしい。それこそ本当に理不尽だ。理不尽なら理不尽のままにしろよ。

「嫌いだ。説教は……」

ボソッと呟く。

「……捕まるし、滅茶苦茶になったし、私もなんだか恥ずかしい言葉吐きまくちゃったけど。それでも一周回って高橋君と一緒なのは嬉しいよ。本当に嬉しい。たとえ短い期間でもこの瞬間を大事にしたいな」

　先生は微笑む。

……自分が逃亡するとは思わなかった。というか人を殺すこともまだびっくりしている。昔は優等生で逆らわなくて良い子していたのに。

あーでも殺人鬼には大人しくて良い子が多かったらしい。
きっと裏では沸々とした憎しみ、嫉妬、怒りがあったんだろうな。

発散方法が分からないから最後はこうなる。それだけ。本当にそれだけの話。何か特別な理由があるとしたらこの世の不公平さに恨みがあったぐらいか。

「……明日、どっか行きたいところある？」

「え？」

「捕まるまでに好きなところに行かない？　どうせ捕まるなら楽しいことして捕まる方が良くない？」

チラッと見ると、先生は微妙に不安な表情をしながらも小さく頷いた。

そう、それで良い。後は流れに身を任せていれば良い。俺達にはもう人生の大半が無いのだから捕まるまで好きにやろう。

そして捕まる時にはこう言ってやる。

「何もかもクソみたいだったけど、ちょっとは楽しい思い出を作れました」

って。

二

死の恋　after story

著　　千里

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社